

## 雪の便り

森本 雍憲

十月も半ばを過ぎると大学周辺もさすがに秋深まるとの感じになるが、私の生まれ育った北国からはもう初雪の便りが届いている。坂戸に住んで十年になるが夏に札幌へ帰らなかったのは今年がはじめてで、秋に行ってみようと考えていたが、いろいろと用事が重なって行けそうもない。雪の便りを聞くと日頃忘れていた北国の秋を思い出す。

その北国では秋が深まって十月にもなると食物が一番美味しい季節となる。まず第一に文字通り新鮮な「秋味」を馬鈴薯や大根とともに味噌で味付けした石狩鍋を食べることができる。秋刀魚や鱈（たら）、帆立や北寄貝も身がしまつてうまい。鮭（ほっけ）も脂が十分にのっていてこちらで食べるのとは大違いである。つるべ落しの夕日がしむ頃大通り公園で食べるときびの味は格別である。

住んでいた頃は気が付かなかったが、こちらへ来てようやく北海

道の食欲の秋の良さが理解できた。十一月になると寒がふりいつしか雪に変わり気が付いた時は根雪となって長い冬に入るのである。その直前の十月は生きとし生けるものにとって最も大切な季節であり、自然そのものが料理人といっても良い。

食欲の秋に早く北海道へと思いつつ行けないのは、逢いたい人に逢えなくなるとなおその女性への思いがつのと同じような気持である。今年の冬は、無事越すことが出来るだろうか。少しばかり気になっている。

（もりもと・やすのり 薬学部教授）